

編集室から

1月29日に石川県在住の静岡県人会が設立、静岡県の川勝知事をお招きして、盛大な交流会も開催されました。お隣富山からも静岡県人会代表の方が参加され、日本三名山の富士山・白山・立山を擁する地域の静岡ゆかりの方々が揃いました。

石川静岡県人会の会長には、金沢工業大学学長の石川氏を選出。その他役員の皆様は、多士済々のお顔ぶれとなりました。石川県から地域づくりコーディネータを、静岡県から観光振興アドバイザの公職を、それぞれお預かりしている私も不肖ながら幹事を仰せつかり、全ての司会進行をさせて頂きました。

元大学教授で文化人でもあられる川勝知事は、静岡では徳川文化を誇るが、雄藩でもあった加賀藩には伝統・文化が色濃く残っており、それに触れる必要ありと語っていただきました。北陸の歴史的豊かさを大切に感ずる身にはありがたいお言葉でした。

静岡からお越しの石川県人会長は、大雪の北陸にいたく思いをされた様子で、長く温暖な地域に住んでいると、わが故郷はかくも厳しいものかと挨拶されていました。

出身者・在学者・勤務者に限らず、ひろくご縁がある方を対象として総勢120名でスタートした県人会。今後会員相互の交流を通じて両県の交流がますます拡大することを願わずにはいられません。

話題は変わりますが、金沢よりも新潟・富山・福井の方が雪が多く、住民の皆様は大変な思いをされていることでしょう。また、南九州では火山灰の報道。こちら、乾燥していても、雨で濡れて固まっても大変厄介です。困難な経験があると、遠方の変事にも心を寄せられます。好天が続く地域の皆様には、その事を思い出して頂ければと存じます。(は)



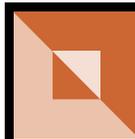
このニュースは、計画に携わる若手の技術者を育てることを目的に発行を始めました。その後、計画という仕事の内容や、普段、計画マンがどのようなことを考えているのかなどに触れて、少しでも業界を知っていただければと考えて編集しています。



2011/02
(株)アスリック
<http://www.neting.or.jp/usric>

〒920-1167
石川県金沢市もりの里1-149-302

電話 076-233-7217
Fax 076-233-7375
Email usric@neting.or.jp



2011/02
(株)アスリック
<http://www.neting.or.jp/usric>

如月



今は無き寝台特急「北陸」号
ラストラン1ヶ月前の
機関車交代 by hama

完全有機栽培（無農薬・無化学肥料）で、お茶の栽培・製造・販売をさせて頂いております。

現在の農業界では、化学肥料、農薬使用による栽培方法が大部分を占めております。

では、何故、無農薬・無化学肥料という栽培方法を取っているのでしょうか。

一人の人間が生きていくには、どれだけの物が介在しているのでしょうか？まず生きていくのには食べ物が必要です。そして衣類・住宅等……。ただ一人の人間が生きていくだけでも沢山の物との関わりを持たなければなりません。ではその物の存在、維持というものはどのように行われているのでしょうか。

今、この地球上にはとても多くの生物（植物・動物・人間も含む）が生存しています。

そんな中、たとえば、植物・動物の関係。植物は動物の呼吸により出された二酸化炭素を吸収して生命を維持しております。又、動物は植物の出した酸素により呼吸し、生きております。現実的には、地上にあるものすべて一つ一つが自然の仕組みの中では掛け替えのない役割を担っているのではないのでしょうか。確かに農薬・化学肥料はある面から見ればとても妥当な方法だと思われれます。しかし、生命の次元で観た場合には大きな輪としてつながっているそれぞれの命の流れを途中で絶ち切る事になるのです。

そしてそれがどのような結果を産み出すのでしょうか？

人間は自分の体の調子が悪くなれば、自分で悪い条件を取り除き、健康な体に戻そうと努力します。

でも、地球上でそのような事ができるのは人間だけなのです。

山の木々が健康を害するような環境になってきたから、もつと条件の良い場所に移ろうと思っても、決して出来る訳ではありません。人間以外の生物の生存は、ある意味で総て人間に委ねられているのです。同じ地球を構成する生きものなのに、

「何をしてもかまわない」

正しさの基準を人間中心に定めて良いものなのでしょうか？

今、私達に求められているものは、命の次元で物事を観てゆくことなのではないでしょうか。そして、生あるもの総ては、単独で生存出来ているのでは無く、みな一つの輪としてつながっていることを思いだし、今まで、私達人間が断ち切ってきた輪を、元の状態に戻すことが、なによりも大切なことではないのでしょうか？

葉っぴい向島園はお茶を通してこんなメッセージを伝えていきたいと思っています。



【プロフィール】
（むこうじま かずと）お茶や生あるものとの共存を趣味に「葉っぴい」の向こうに宇宙を見た！宇宙とは感動と喜びの爆発物だ」と考える二十五歳。

漬のつぶやき 『白い雪』

幸い、金沢にドカ雪は降っていない。その代わり、数日降り続けて、低温のためそれが融けない。短時間の雪かきを何回やったことか。

駐車場の隣は、ゲームセンターの職員駐車場である。学生のアルバイトだと思いが、皆礼儀正しい。除雪もこまめ丁寧に行っている。反対側は、小児がいる若夫婦。こちらは、一向に除雪をしない。境界が問題になる。除雪しないとドアが開かない。相手は、こちらが除雪するので、何もなくても乗降できる。除雪の度に、どうしたものかと、鬱憤はかなり溜まっていた。

ある時、二日続きでまとまった降雪があった。翌朝でかけるために夕刻、除雪をしに行った。珍しく両側とも除雪をしている。車上の雪を下ると、隣接境界に雪が溜まる。ゲームセンター側の若者には、自分がやるからという、道具は貸してくれた上に、こちらの前まで除雪を手伝ってくれた。若夫婦のご主人は、自車だけ無理矢理出して出かけていった。

その後、なんとか周囲の雪を対処して、前の歩道と道路までの除雪。すでに雪を捨てる場所がなくなっていた。雪を踏み固めれば、車は何とかが出ることが出来る。仕方なく、路上に満遍なく雪を重ね、踏み固める作戦に出た。問題は、歩道である。除雪中にも転倒する人がいた。子どもやお年寄りがかなり行き交う。少なくとも自分が借りている前での事故は避けたいと、踏まれて固まった雪をどかして掛かる。そこへ、件のご主人が帰っ

てきた。既に、運転席から下りられるように除雪はしてあった。が、一言の挨拶も無い。腰痛持ちの腰をかばいながら、歩道の雪を起していると、彼は歩道を放置して、やはり自車が通る所だけ掘るうとしていた。声を掛けた。「余計なお世話なんだけど、この歩道は子どもや年寄りが通る。危ないので、歩道は除雪しておいた方が良くと思う」と。意外に素直に彼は、聞いてくれた。

若者の力仕事は速い。あつと言つ間に、片付いてゆく。なんとか、目途がついて「つき合わせて悪いね」と声を掛けて汗だくの着替えに戻った。

しばらくして通りかかると、彼は除雪を終えていた。

案の定、自分に必要な部分だけ対処されていた。苦笑いしながら横を通り過ぎようとして気づいた。我が身こそ、相手の場所の前まで掻くと返って嫌味になると、自分の処しか除雪をしていなかった。

した事が返って来る、という。何処までも、相手を責める気持ちだが、上から目線に繋がっていた。自分の論理・正義尺度に合わない言動を、人は責める。相手の立場という逆の視点を完全に理解したとき、それは許しではなく、自らの正義の疑わしさ・脆さへの気づきが変わる。

除雪は大変だが、それに勝る気付きはありがたい。近年、気に入っている御木幽石氏のカレンダーの今年一月に、こうあった。
お互いを 敬つてこそ 和が生まれる。
和は 福を呼ぶ。

きただより46 弘前大学地域社会研究会 上村 康之 『大学について2題(1月のニュースから)』

今回は大学の入試と就職に関し2題、述べてみたい。

第1は「私立大学のセンター試験参加」についてである。今年も1月15日、16日に、センター試験が実施された。翌日17日の秋田さきがけ新聞に慶応義塾大学が「センター試験では大学の意になかった学生を獲れない」と来年度から不参加との記事が出た。やっとセンター試験に対し「NO」とした大学が現れ歓迎したい。

本来センター試験の前身である共通一次試験は、大学受験戦争の緩和、旧国立一期校・二期校の格差是正、難問や奇問を避け基本の習熟度をみることが主目的であったはずである。しかし、受験科目数の変更、選択科目の大幅な軽減など度重なる制度変更によりすっかりその目的は形骸化した。センター試験は共通一次試験以来の本来の意味を失ってしまっており、原点に立ち返り再考する必要がある。

そして、国公立大学のみならず私立大学も参加を余儀なくされ、いまでは私立大学の100%に近い大学がセンター試験に参加している。ここに大きな問題がある。

現在、私立大学は関東、関西の一部有名校以外は、どこも軒並み受験生を減らし、経営悪化の要因になっている。それに拍車をかけた一つの理由として、センター試験への参加である。受験生はセンター試験を受けて、その結果をみて希望する私立大学に受験科目を選び出願し合否判定を受ける。結局は、私立大学自身の一般入試受験者の減少、受験料収入の減少に拍車をかけているだけなのである。また、受験者が受験する大学に対して抱く思いも弱く、第一志望の学生はほとんど存在しない。これらのことから、私立大学がセンター試験に参加するメリットは感じられない。私立大学は、そもそも独自の校風、人材養成の理念があるはずである。また、センター試験以外では、推薦入試、AO(アドミッション・オフィス)入試といった実質、無試験入試の比率が高まり学生の学力低下も叫ばれて久しいなか、私立大学は改めて入試制度をセンター試験の参加の是非も含め再考し、自校の入試の価値を高める必要がある。ただこれは、一大学の問題ではなく全国の私立大学全体や文部科学省などで議論していかなければならない。

第2は新卒者の就職活動の早期化と長期化についてである。日本経団連はこの問題に対し、正月明けに平成24年度採用から広報活動を現在より2ヶ月遅い「3年の12月以降」、面接は従来通り「4年の4月以降」とするとした。1月25日、国立大学協会と日本私立大学連合会は、面接などの選考を「大学4年の夏以降」に経済界に働きかけることになった。筆者は経団連の案に「それでも早い」と思っていたため、やっと関係団体が動いてくれたと思わずにはほっとしたところである。

この件については多くの問題があるが、いくつか例をあげる。

大学3年の夏から就職活動が始まるため学生の欠席が発生し、授業やゼミ、サークル活動等にも支障をきたしている。大学にも慣れて、やっと世の中に視野が広がり、何かに気づいていくときに、大学生としての達成度が低い大学3年の夏から就活一色になってしまうことは本人にとってデメリットが大きい。また、大学では就職難を背景に、キャリア教育が3年次どころか1年次からどんどん入ってきており、このまま増えていくと真の大学教育が成立しなくなると危機感を抱いていた。

この新卒者の就職活動に関しては、今後、大学、経済団体、関係省庁で具体案を定めるようであるが、途中で骨抜きにならないような強いルールづくりを求めたい。

『田舎暮らし』 株式会社GARBAGE代表 川島 嘉浩

遅くなりましたが、皆様あけましておめでとうございます。また一年私の取り留めもない物書きにお付き合いくださいませ。

今年は雪がすごいですねー。というのも1月23日から29日まで故郷の石川県能登町に里帰りしております。ニュース番組の終盤に雪だるまマークが日本海側を見事に占拠している様子は見ていましたが、まさかこれほど積もっているとは!というのが能登空港を降りた時の感想でした。

私自身が冬の時期に帰省することが久しぶりだったのと、一面の白い世界に私だけでなく妻もそして多分4か月の娘も少し高揚した面持ちで迎えに来ていた母親の車に乗り込みました。

しかし、そんなテンションも実家についた20分後には跡形もなく消え去りました。滑って娘を落とさないように、ブーツの中まで染み込んでくる雪にも目をくれず、すり足で坂を上る私。パンプスという出で立ちのため茫然と坂を眺める状態の妻。そして何より、気密性という概念が存在しない能登の家は雨雪から守ってくれるだけで外気とほぼ同じ寒さをもたらしてくれます。ですが、18才までの私にとっては、この冬の暮らしが当たり前だったんです。毎朝6時に起き自宅の前の雪かきをし、それから除雪機がまだ来ていない道を、雪をかき分けながら登校するという日本の典型的な農村の子供という生活でした。そんな私も東京での生活が20年経つと、能登での生活がとても違う世界の事のように思えてなりませんでした。

よく仕事やセミナーの案内などで「田舎暮らし」に関する話を聞いたりすることがあるのですが、その多くが、「ゆとりあるスローライフ」、「自然との共生」と一見耳障りのいい言葉ばかりが並べられているような気がします。本当にそんな田舎暮らしが存在するのでしょうか?それは暮らすのではなく、一時的滞在を指してませんか?「暮らす」というのは、自然や人間、その土地の文化、慣習、暗黙のルールなどを自身の生活に取り込んでいくという事と考えます。決して、「田舎暮らし」は心地のいいものばかりではありません。もしかすると、今の私みたいに「あー早く東京の家に帰りたい」と思うことのほうが多いかもしれません。

今後も能登のような日本の地方における過疎化は進むでしょう。そして各地方の行政も移住者の獲得に向けて、都市生活者に夢を抱かせる謳い文句を並べるに違いありません。その結果、わずかばかりでも田舎への移住を決意した都市生活者は田舎の生活になじめず貯金も目減りした状態で都市生活に戻ってくる。誰もハッピーではありません。

団塊世代の大量退職が進む中、「田舎暮らし」の誘致事業はこれから本格化すると思われれます。その際に需給のミスマッチが起きないためにも(それこそその後の人生の話です)、受け入れ側における様々な情報開示の姿勢や、移住希望者側における田舎暮らしに対する心構えのようなものは求められてくるでしょう。私個人としては、食べ物もおいしく、人もやさしい能登に多様な地域から人が集まり、またそこから新たな取り組みや文化が生まれることを期待しております。

最後に一句「吹きすさび」とはいえ昔は住んでいた 心からこたえる 能登の冬かな」おそまつでした。

もう2年前になるが、2009年2月14日(土)に「第1回ラグジュアリーライフスタイル国際会議」が石川県立美術館ホールで開かれた。案内は本アスリックニュースを主宰する濱さんからだった。

「ラグジュアリーライフスタイル??何じゃそれは」説明にあった会議の趣旨は「石川県の観光業を活性化するために、海外からの誘客、とりわけ海外富裕層の誘客が極めて効果的な手法と考えている。しかしながら、京都など海外からの観光客に人気のある観光地に比べて、石川県の豊富な観光資源や洗練された食文化が世界に知られているとは言えない。また、観光関係者は、世界の『本物のラグジュアリーマーケットやラグジュアリーライフスタイル』というものに触れる機会が無く、知識や経験が不足している。そこで、それらの本物を知るきっかけとして本会議を開催し、意識改革・喚起を図る」というのだ。

県がこうしたことをやるのかあー。凄い!静岡県は川勝知事になって強く文化による振興を意識しだしたところであり、このレベルにはまだまだだ。

主催者を見ると私が敬愛する山中温泉かよう亭の上口昌徳氏の名前もある。25年も続いている冬の食イベント「フードピア金沢」もやっている時期だ。ならば行くしかない。

会場の石川県立美術館ホールに着いて驚いた。石川県の工芸品が並ぶミュージアムショップに、パティシエが腕を振るう姿が見られるオープンカフェがあり、ホールではパーティーができる。アートを肩肘張って見るというのではなく、アートの囲まれた豊かなときを過ごす空間に、この美術館はなっている。今や「兼六園」じゃなくて、まずは「金沢21世紀美術館」とも言われるようになった石川県の文化度の高さにひたすら感心した。

この「ラグジュアリーライフスタイル国際会議」では、世界的キーマンから見た「人生を豊かにする真の旅・食」とは如何なるものか?世界的キーマンには、石川など日本の地域資源の価値はどのように映るのかなどが語られた。

会議の後にはホールでミニパーティーが開かれた。ここで交流してこそ本会議に来た意味がある。



そこに京都吉兆の徳岡邦夫氏がいた。氏の前には人が次々と名刺交換に訪れる。私も頃合を見計らって名刺交換をする。こんなときに話す内容は、やはり由布院のことだ。こうした著名人と共通の話題を引き出すには、由布院のことしか持ち合わせがない。

残念ながら、限られた時間では会話らしいことはできずじまいだったが、最近徳岡邦夫著「京都吉兆しごと作法」を拝読した。

「『お客様が思わず涙を流すような仕事をしよう』を合言葉に社員の意識改革に取り組み始め、もう十数年が経とうとしています。」から文が始まる。

文中にある一番気になったこと、そして共感したことを書き出してみる。

**本音で語ることが人間関係で最も重要なことと考えている。誠意を伝えようときれいな言葉で飾ろうとすると、かえって真意とのズレが生じ、言葉に嘘が混じり始める。相手の信頼を得たければ、自分の考えていることをストレートにぶつけること。これに勝る方法はない。社交辞令は必ず相手にばれる。それでも相手と信頼関係が築けるのは、社交辞令の背景に相手への気遣いがあり、同時にそれが伝わったときだけだ。

相手との信頼関係を築きたければ、とにかく実直に本音を語ることだ。たとえば知らない相手から声を掛けられたら「申し訳ありません。私の記憶が曖昧で、どうしてもお名前が思い出せないのです。もう一度、お名前をお伺いしてもよろしいですか?」

(この場面が多過ぎる小生は、是非使ってみようと思っている。)

「今度飲みに行こう」という社交辞令が好きではない。本当にそのつもりがあるのなら、その場で予定を決めて然るべきである。「社交辞令のつもりで飲みを誘ったら、徳岡が『本気なら手帳を出せ!』と言うものだから、後に引けなくなったんだ。あの時は、おかしな奴に声を掛けちゃったと思ったよ(笑)」しかし、それがきっかけで30年来の友人関係が続いている。人間関係を豊かにしてくれるのは、その場しのぎの社交辞令ではなく、ありのままの本音である。少なくとも私はそう信じて、今も直球勝負を心がけている。 **

徳岡氏に「今度飲みに行こう」なんてことは到底言えるものではないけど、私は気に入った人には我「悠久庵」でのそば会に来てもらうことにしている。ここで培っていく人との関係が面白い。これからも自分流の直球勝負を仕掛け、かけがえのない縁をつくっていききたいものである。

